

最近私のゼミで、学生がアフリカのインフォーマル・セクターに関する本の紹介をしてくれた。その本の著者は、インフォーマル・セクターの人々が国家の規制を逸脱する姿に彼らのエンパワーメントを見ているとのことであった。なるほど支配層から押しつけられた不当な秩序・制度に従わないことはそれ自体一つの抵抗の形態であり、むしろそうした規範から逸脱できることをエンパワーメントの証と捉えることも可能であろう。

この学生の報告を聞きながら私は、なぜかペルーのことを思い出していた。エスタブリッシュメントに不信感を持ち、制度やルールを無視して個人的社会上昇に邁進するリマの下層の人々とイメージが重なったからである。そして私の頭の中でそのイメージは、フジモリ政権が長期にわたって高い支持率を誇った事実ともつながっていった。フジモリ前大統領はプラグマティズムを標榜し、制度やルールを破ることを意に介さなかった。

しかしそのような無原則の「プラグマティズム」が国政レベルで何をもたらしたかは、今では元大統領顧問モンテシーノスが残した膨大な隠し撮りビデオによって明らかになっている。軍事政権の激しい弾圧で多くの犠牲者を出したラテンアメリカの左翼が人権と民主主義の重要性を悟ったように、フジモリ政権の10年を経験したペルーの知識人たちの間では「法の支配」や「制度」の重要性を熱心に説く声が聞かれる。彼らの中にはかつて革命を夢見た元左翼もいるが、ある意味で革命とは対極を成す「法の支配」や「制度」の重要性が改めて認識されるようになったことは健全な変化と言えよう。

フジモリ前大統領による民主主義制度の破壊に対して、ペルー国民の反応は当初鈍かった。フジモリ政権を支持したのは下層階級に限られないが、下層階級の人々にとってみれば、自分たちに何もしてくれなかった（と彼らが考える）制度が破壊されていくのは、小気味よいことでさえあったかもしれない。しかし、民主主義は必要な制度である。それが証拠に、ペルーの人々は定期的に独裁政権打倒を叫んで立ち上がる。方便のために独裁を容認するという行動は、永遠の独裁体制を容認することではないからである。しかし方便として独裁を容認することの必然的結果は多くの人に対する迫害や弾圧であり、クーデターや暴動によってしか政権を変えられないことである。

確かに、ペルーの以前の民主主義体制は質の悪い民主主義体制であった。しかし民主主義体制を壊すことによって新たな望ましい民主政を創出することができないことは、フジモリ前大統領による1992年の「上からのクーデター」が明らかにしている。望ましい民主政を達成するには、いまある民主政を破壊するのではなく、それを改良して行くしかないのだ。ではどうやってそれを改良するのか。

最も中心的な手段は、単純なことだが選挙権の賢明な行使である。候補を見極め、よりよい候補に投票するという有権者の賢さこそがよりよい民主政を実現する。政治家の腐敗が明らかになる度に「政治家に裏切られた」という声が氾濫するが、そのような政治家に投票した「加害責任」を社会に対して痛感している有権者はどれほどいるだろうか。フジモリ・クーデターに喝采を送ったペルーの人たちのどれだけが、フジモリ氏は自分たちが選んだ議会を閉鎖したのであり、それに喝采を送ることは有権者としての自らの無能に祝杯をあげることだと理解していただろうか。有権者が自らの責任を棚に上げて政治家を非難している限り、よりよい民主政は訪れないであろう。もちろんこれはわが日本にも当てはまることである。